

# 救急車足止め 最長で10時間

## 病床逼迫が影響

コロナ第5波

新型コロナウイルス第五波の間に、全圏五十消防で発生した「救急搬送困難事案」計約三千六百件のうち、駆け付けた救急車が現場で足止めされた時間の最長は、さいたま市消防局で起きた十時間十分だったことが二日、共同通信調査で分かった。病床逼迫で搬送先がなかなか決まらなかつた。数時間を要した例は各地であり、救急現場の深刻な実態が浮き彫りになつた。第六波で繰り返さないための医療体制整備が急務だ。

第五波の勢いがあつた八月一日～九月五日に発生し、傷病者にコロナ感染の疑いがあつた事案のうち、現場到着から搬送開始までの時間が最長だったケースを聞いた。首都圏や関西を中心に長時間を要した例が発生し、横浜市消防局は四時間二十三分、大阪市消防局は三時間四十七分と回答。川崎、相模原、広島、熊本各市の消防も三時間を超えた。

さいたま市消防局によると、八月十四日午後八時ごろ、自主検査で陽性だった四十五歳男性が呼吸苦となり、自宅から救急車を要請した。駆け付けた隊員は各医療機関に受け入れ可否を照会。「コロナ患者のベッドが満床」との回答が続いた。

東京や栃木、茨城の病院も含め、八十九回に及ぶ照会の末、市外医療機関への搬送が決まり、出発したのは十時間以上が経過した翌十五日午前六時半ごろ。幸い男性の容体は悪化しなかつた。